

2015. 7. 25

No.190

編集・発行人 樋口みな子

E-mail  
minginga@agate.plala.or.jp  
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)



## 環境と脱原発、平和と人権を伝える 「銀河通信」が27周年、190号に



写真  
7. 19  
富良野  
岳のエ  
ゾノハ  
クサン  
イチゲ

写真下  
書き  
通信の  
頃

7月15日、多数の市民が反対しているにも関わらず、安保関連法案が国会で強行採決されました。怒りで震えました。「戦争できる国」にする明らかに憲法違反の法案です。

札幌でも、法案に反対する集会やデモ、講演会などが連日のようにありました。また強行採決に反対し、必ず廃案にしようとする国会前での集会には3日間で20万人が集まり抗議したと報じています。

環境と脱原発、平和と人権を伝える「銀河通信」がこの7月で27年、190号になりました。ささやかな通信ですが、今こそ自分のことばで「戦争はいやだ」と伝え続けることの大切さを感じています。

90年、「基地の中に沖縄があった」で沖縄戦の傷あと深いガマ「チビチリガマ」を家族で訪ねたルポが機関紙コンクールで優秀賞をいただきました。



これです。社会的な問題を書いていいんだと紙面の方角が決まったように思います。

91年に湾岸戦争が起こりました。ペルシャ湾の原油流出でもがき苦しむウミウの姿が衝撃的でした。当時、環境保護に深い関心を寄せていたので「地球が泣いているよ」のタイトル（左下段）で書きました。保育園に通っていた息子が「バクダン落とさないで、おうちが燃えているよ」とニュースを見て驚いていたことを思い出します。

当時の通信にこんな一文があります。「自衛隊機が飛んだら中国や韓国の人たちはどう思うでしょう。戦争加害者としての日本を思い起こさせ、不信感を募らせることになるのではないか」。戦争はいつの間にか始まるのです。なんとしても廃案にするために私も力を尽くしたいと決意しています。

2000. 1. 14 声欄

原月	日	発行	扉
7月	19日	富良野岳のエゾノハクサンイチゲ	臨床検査技師 樋口みな子
7月	25日	環境と平和へ 銀河通信100号	一人ひとりの声をすくい上げるという点が弱い。だから、銀河通信の目線は貴重です。普段着の語り口に引き込まれます」と。
7月	27日	基地の中に沖縄があった	紙面は現在、B4判八割も変わりません。二十一年で、二カ月一回発行する。環境、医療、教育、平和などをテーマに、最近では、ガイドライン関連法や国旗、国歌法などを取り上げました。取材のほか、寄稿などもあります。読者の交流欄も目玉です。
7月	27日	地球の心臓	私は、環境保護活動を約二十年間続けてきました。どの問題も簡単には展望を見いだし得ない日本ですが、あきらめていては、何も変わりません。二十一年で、二カ月一回発行する。環境、医療、教育、平和などをテーマに、最近では、ガイドライン関連法や国旗、国歌法などを取り上げました。取材のほか、寄稿などもあります。読者の交流欄も目玉です。

# 自然保護全国集会に参加して

## 日本山岳会の自然保護活動の これからを考える



日本山岳会の自然保護全国集会が7月11日～12日に東京・青梅で開かれました。

青梅は東京の奥座敷で多摩丘陵の一角にあり、森と川に囲まれた美しい街です。羽田からいくつも電車を乗り継ぎ、10日夕方ようやく到着。

宿の近くを多摩川が大きく蛇行していて、上流に架かる柳淵橋（写真右）は鉄骨の長いつり橋で深い森にとても似合っています。



11日の午前中は北から南まで18支部が報告。とても全部は書ききれませんので特に印象に残った宮城支部の取り組みを紹介します。

柴崎徹さん（写真下）は、2013年から宮城県の山地や丘陵における放射線量の測定を行ってきました。宮城県北部から岩手県南部に亘る地域を詳細に調査し、その結果、金華山～牡鹿半島、登米～一関・前沢に亘る北上山地、築館丘陵～磐井丘陵の3ヶ所に線量の高い地域が特定できたと話されました。

放射能汚染廃棄物の最終処分場に挙げられている山地候補地については奥羽山脈に近い山地帯3か所が選ばれており、いずれも流域の源頭にあたり、多



くの人が注視している。環境省や県がどのような判断をするのか宮城支部としても適切な対応をしていく必要があると話していると締めくくりました。

福島支部の高田雅雄さんは阿武隈山地は高濃度の放射能で立ち入りできない。除染作業が行われているが、植生が変わってしまうと

報告しました。

私は山岳会が山の汚染に積極的に関わり、美しい山を取り戻すために努力されていることに深く感銘しました。



写真右・青海のアジサイ

午後は自然保護委員会50年の歩みをスライドで紹介。70年代高度経済成長期に、山岳地帯に大規模な道路建設計画があちこちで持ち上がり、日本山岳会は、自然破壊に反対の決議をしています。大雪縦貫道計画、奥秩父連峰スカイライン計画、南アルプス・スーパー林道修復停止の要望書提出など。

98年にはシンポジウム「絶滅から救おう高山植物！保護と盗掘防止を考える」が北海道高山植物盗掘防止ネットワーク共催で東京であり、私も参加。当時は山岳会の会員ではありませんでしたが、この市民運動を通じて会員になりました。（写真上）



当時の日本山岳会が山岳の自然環境を守るために積極的に発言し、行動してきたことが伝わってきて

その頃の会員だったら良かったなと思いました。

12日はフィールドスタディで「高尾の森」を歩く。

「高尾の森つくりの会」は2000年か



ら、荒れたスギ、ヒノキなどの人工林を切り開き落葉広葉樹を植樹し、多様で豊かな針広混交林の森づくりをめざしています。（写真右・説明する河西瑛一郎代表）高尾小下沢国有林178Haの広大な森です。

会員は下草刈りや、生態観察を続け、植林には毎年300人が参加しているそうです。当時、子どもだった人が、大人になり、成長した木を見に来るのを楽しみにしている話が印象に残りました。

植林は平地で行われるのではありません。急斜面を登って植えられた1本ごとに、植えた本人の名前と木の種類が書かれていました。さすが山岳会が行う植林は違うなぁと感心しました。

「高尾の森づくりの会」は東京神奈川森林管理署と協定を結び、管理を任されています。アナグマ、カモシカ、サル、リス、キツネ、タヌキ、テン、イノシシなどたくさんの動物が生息し、アオゲラ、アオジ、イカル、カケス、シジュウカラ、ルリビタキ、クロツグミなど鳥類も多彩です。

私も参加した覚えがあるのですが、その時の木はどうなっているのか気になりました。壮大なイベントであったことだけは当時の写真が物語っています。

（写真左・15年で見事によみがえった高尾の森）



## 「学問の自由」を守ろう



7.8 道庁前池のハス

7月8日に「ネット時代のマッカーシズム キャンパス・ウォッチ」と題して学問の自由を考える学習集会有り市民会館の会場は100人を超える参加者で埋まりました。

崔真碩(ちえじんそく)さんは広島大学の教師として「演劇と映画」の授業で「終わらない戦争」という元慰安婦の映画を教材に取り上げたら、ある学生が産経新聞に投稿し問題だと報道された。ネットなどで広島大への攻撃が始まったと語りました。投稿したMは「天皇に賜った日本刀で慰安婦に切りつけるわけがない」と日本軍慰安婦問題を否定し、ネットで広がり、産経事件から朝日バッシングに繋がっていったと語りました。

川原茂雄さんは高校で弁護士を招いて憲法の授業をしたら、道議会で問題だと取り上げられたいきさつを述べました。自民党道議が集団的自衛権をめぐる授業で「反対の立場からの発言があったようで内容に疑問を感じる」と述べ、授業内容に圧力をかけたのです。川原さんは「公平であるとはどういうことか」と疑問を呈しました。また現場教員は、すでに憲法と公務員法と学習指導要領に従って、きちんと真実を子どもたちに伝える授業に日々取り組んでいる。私たち公立学校の教員は日本国憲法を尊重擁護する義務があるので、この憲法を逸脱することなく、またこの憲法が保障する諸権利を国民として行使しつつ、教育活動にあたらなければならないと述べました。

元朝日新聞記者で北星学園大学の非常勤講師、植村隆さんはネットでの不当なバッシングにさらされていることについて、3つの要因を挙げました。1つ目は朝日記者だったこと。2つ目が元朝鮮人従軍慰安婦の被害女性である金学順さんを最初に取材したこと。3つ目が妻が韓国人であることと語りました。植村さんが当時使った「挺身隊」は複数のマスコミも「慰安婦」と混用していた事実を立証もせず「ねつ造だった」と決めつけるのは名誉棄損だと述べました。

社会成人教育学が専門の姉崎洋一さんはキャンパスウォッチ(学園監視)は米国で生まれた大学やメディアに対する監視運動だ。自分たちの意に沿わない教員や記者をネットで監視し、攻撃する。同様の動きが日本でも始まった。自由でのびのびとした教室が危機だと述べました。また学長が国家を代表する風潮が生まれ、14大学で国家斉唱が行われていること。大学の自治、学問の自由が危機に陥っていると報告しました。

特定秘密保護法が強行されて、監視社会の予兆がネットでの攻撃であったことを知り、空恐ろしくなりました。戦争法案も歴史修正主義もすべてつながっています。戦前に戻してはならないと思います。

## 抵抗の拠点から メディアの萎縮を考える



7月16日「メディアの萎縮を考える」講演会が、かでの2・7で開かれました。講師はジャーナリストの青木理さん。  
青木さんの著

書「抵抗の拠点から」は187号で紹介しましたが、慰安婦問題で不当なバッシングを受けた植村隆さんや、朝日新聞の現役編集者、関係した記者を直接取材し、メディアが現在おかれている状況を鋭く告発。一貫して権力への批判的な姿勢を貫いています。

青木さんは、今回の朝日問題について、権力の監視がディアの役割であり、メディアの相互批判はいいけど「国賊」だとか「国益を損ねる」とは言ってはならないと強調しました。メディアの役割放棄、権力と一体化したメディアの体質が背景にある。メディアは疑問や批判の声を上げ続けることが大事だと語りました。

慰安婦問題など負の歴史をなかつたことにしたい歴史修正主義は病的だとも述べました。

ウンベルト・エーコが1997年に書いた「永遠のファシズム」を引用し、ファシズムは他民族に不寛容、排他的になると語り、多数決は間違っていることがある。教育によってファシズムは抑えることができるかと語りました。



講演する北岡和義さん

### 安保法制は廃案に

7月14日、ジャーナリストとして活躍する北岡和義さんのお話を聴きました。

27年間アメリカに住み2006年に帰国され、現在、植村さんの支援もされています。

北岡さんはワシントン演説の評価は大きく割れたと語りました。韓国は侵略と植民地支配、従軍慰安婦問題に触れなかったことに非難の決議をしました。中国も反発しました。また、在米の日本研究者187人が「偏見のない清算」をと日本政府に呼びかけたのです。大きな新聞記事になりました。声明に名を連ねたのはエズラ・ボーゲルさん、ジョン・タワーさん、ノーマ・フィールドさんなど。声明は従軍慰安婦問題について「日本政府が言葉と行動において、過去の植民地支配と戦時における侵略の問題に立ち向かい、その指導力を見せる絶好の機会」と言い切っています。戦後70年を経て日本の国はどうなったのかをきちんと検証すべきだと、安保法案に懸念の意を示しました。

## 「100年の罅 大逆事件は生きている」 上映会に400人！



さっぽろ自由学校「遊」のTさんからお誘いがあり、「100年の罅」上映会実行委員を引き受けました。

最初に大逆事件の概要と映画を紹介します。

この映画は「シロタ家の20世紀」や「ルイズその旅立ち」などの優れたドキュメンタリーを監督した藤原智子さんが、本映画では脚本を担当しています。

大逆事件は明治末年に起こった天皇暗殺を企てたとして大勢の罪なき人が投獄され、幸徳秋水や管野須賀子、大石誠之助ら12人が絞首刑に処せられました。彼らは日露戦争に反対し、あくまで非戦・平和を主張した人々でした。

犠牲者の名誉回復や顕彰をする活動も生まれている大逆事件について、犠牲者たちが何を考え何を思っていたかを、同時期にフランスで起こったえん罪事件「ドレフュス事件」との対比も交えて明らかにしていきます。90分。

幸徳秋水は有名ですが、ただ一人処刑された女性、管野須賀子はどんなことをした人なのかはあまり知られていないようです。彼女は田辺で発行されていた新聞（牟婁新報）で記者として活躍しました。廃娼運動や男女同権の運動に参加した女性です。

また和歌山県新宮出身の大石誠之助は医師で、牟婁新報に社会主義的な投稿を数多くしました。医師であると同時にクリスチャンで、貧しい人からはお金を取らず、町の人からは赤ひげ先生のように感謝された人でした。

時代背景が異なるとはいえ、現在まで根絶できない冤罪事件や、いよいよ閉塞感が強まるばかりの社会の傾向を見つめ直すきっかけともなり得る作品だと思えます。

6月26日、教育文化会館での1回目の上映は早朝にも関わらず満席になり、補助いすも出して167人が鑑賞しました。4回の上映で約400人が参加しました。（写真右・解説する北村巖さん）



明治政府は、起きなかった出来事に対して処刑と無期懲役という極刑をもつてのぞみ日本近代史の岐路にクサビを打ち込んだのです。演出を担当された田中啓さんは「100年経ってそのクサビは豊かな森に覆われ、森の中では死者の声も生者の声も罅となって響き続けている」と述べています。

今また、言論の自由や表現の自由が大事にされない状況で、このドキュメンタリーは「今こそ、黙ってはならない」と訴えかけてきました。

北村巖さんのコンパクトな解説も良かったです。北村さんの著書「大逆罪」が参考になります。関心のある方はお読みください。

## 紛争なき未来へ コロンビア・ 先住民族の声を聞く

6月2日北大学術会館で開かれた、コロンビアからいらした先住民アワの指導者であるホセ・メロ・チンガルさんとフォトジャーナリストの柴田大輔さんのお話を聞きました。

南米コロンビアは半世紀も内戦が続いて、600人以上のアワが犠牲になりま



した。先住民族は102民族、137万人が暮らす豊かな文化を持った国です。

ホセさんは、リーダーとして国軍やゲリラとの交渉役を担っていますが、アワ族は母なる大地から生まれ自分達の土地を耕し、自然と共に生

きていると1本の杖を差しだしました。（写真・右上）ひもの色は茶色が大地、緑が自然、白が平和、青が宇宙です。

北海道ではアワと同じく「人間」を意味するアイヌ民族の人々と交流したホセさんはアイヌ民族の生き方や考え方と共通点があり、伝統を継承していくことの大切さを再認識したと語りました。

地域再生のために、民族の文化や心を伝える「記憶の家」の建設を目指しています。争いのない未来には民族が守ってきた知恵が必要だと訴えました。寄付も募っています。

柴田さん（写真上）はコロンビアに惹かれたのは生物多様性と、先住民が温かく迎えてくれたことだったと語りました。

ひとたび紛争が起きれば、住んでいた人も土地も奪われます。現在はマグイに戻っていますがホセさん自身も集落から逃げなければなりませんでした。

他国の方のお話を聞くと戦争のもたらす被害の大きさを実感します。戦争法案には断固反対です。

## 『とても個人的な谷川俊太郎展』に お出かけください

札幌在住の谷川俊太郎さんファンである古川奈央さんが企画展を開催しています。

ファンの方はもちろん、詩が好きな方、活字が好きな方、面白いものが好きな方、名前だけ知ってるという方、何か気になるという方、とても個人的な小さな「街なか図書館」に、ぜひお越しください。本はもちろん映像や音楽、グッズなど、俊太郎さんの多彩な表現を集めています。

私もゆったりとした空間で谷川俊太郎の世界を堪能しました。ギャラリーSYMBIOSIS札幌市中央区南2条西4丁目10-6で7月30日まで12時から19:30まで。企画者の古川さんにもお目にかかれますよ。



## 富良野岳(1912m)で花パトロール



7月19日、札幌を出るときは雨で、登山は厳しいかとも思っていたら富良野は雨が上がり晴れていました。

高山植物のパトロールに絶好の日よりになり、山仲間と十勝岳温泉を

8:40出発。安政河口からは深くえぐれた又ッカクシ富良野川を渡ると、ウコンウツギやマルバシモツケが咲いている。上ホロ分岐9:50。ここから先はお花畑が続く、長い登りを楽しみながら登ります。エゾツガザクラとチングルマ(写真上)やヨツバシオガマ、エゾコザクラ、エゾヒメクワガタなど、ピンクや青の饗宴。雨上がりで空気も澄んでいて気持ちのいい登りでした。肩分岐 11:30ランチタイムとする。11:50肩分岐を出発。ここからは急な登りですが、お花畑が一面に広がっていて、パトロール(右写真)をしながらゆっくり進む。エゾリソウが少し増えている。メアカンキンバイ、エゾノハクサンイチゲ、イワヒゲ、ミヤマアズ



マギクなどたくさんの花が迎えてくれました。特にハクサンイチゲの群落が見事で涼しげでした。

12:40 富良野岳に到着。富良野岳13:00出発し十勝岳温泉には15:15到着。風もなく穏やかな一日で雄大な山を満喫しました。

しばらく山に登っていないので体力が心配でしたが、ほぼ標準タイムで歩けたのがことのほか嬉しくこれを機に、また登山を楽しみたいと、次回の山に思いを馳せています。



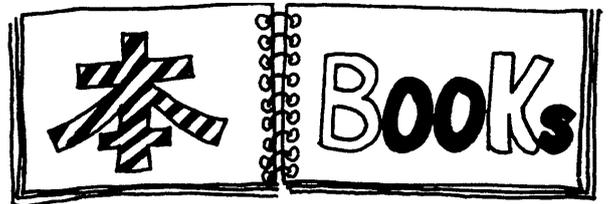
エゾリソウ

主稜線から振り返ると形のいい十勝岳が頭を出す



メアカンキンバイ

エゾヒメクワガタ



### 朝鮮と日本に生きる — 済州島から猪飼野へ

金 時鐘著 岩波新書 860円

1948年に済州島で起きた「四・三事件」に関わり、両親も国も捨てて日本に渡り、在日朝鮮人として



生きてきた86歳の詩人の回想録です。

著者は日本統治下の朝鮮で育ち皇民化教育を受けますが、戦後母語を学び解放後の朝鮮半島の統一を目指す南朝鮮労働党の末端の活動に身を投じます。ところが、数年も経たぬ間に四・三事件の惨劇が身近に迫り、父の手筈で済州島を脱出します。密航船が日本の領海に入ると、青酸カリの赤い薬包を海に捨てた記憶が生々しい。

植民地朝鮮で日本的抒情性を身につけた「皇国少年」がそうした感性に抗う詩人へと脱皮してゆく軌跡が綴られます。

統一祖国を思想化することに「在日」の存在意義をみる詩人の想いが心に響きます。ひとりの「在日」詩人の回想を手がかりに、日本の来し方を考える好著です。苦難の人生を歩まざるを得なかった人々の歴史の真実をを知れば、ヘイトスピーチがいかに卑劣な行為であるかが歴然です。

あとがきに「反共の大義を殺戮の暴圧で実証した中心勢力はすべて、植民地統治下で名を成し、その下で成長をとげた親日派の人たちであり、その勢力を全的に支えたアメリカの、赫々たる民主主義でした。まだまだ明かせないことをかかえている私ですが、四・三事件の負い目をこれからも背負って生きつづけねばならない者として、私はなお己に深く言い聞かせています。記憶せよ、和合せよ」と著者は書きました。それは私たち日本人に向けられた言葉でもあります。

5万人もが犠牲になった四・三事件に真摯に向き合った著者の姿に、心揺さぶられました。



### 断片的なものの社会学

岸 政彦著 朝日出版社 1560円

著者は社会学者として、たくさんの人に話を聴きますが、その最中に生まれる「無意味」なこと、理解や

理論をはずれるものに心を惹かれると言います。学究的分析からこぼれおちるカケラたち。

本書は小石や、犬の死や、どこかの学生をつぶやきなど「分析できないもの」ばかりを集めたエッセーです。

いろいろな人の「人生の断片」が鮮やかに切り取られて、エッセイでありながら短編小説を読んでいるようでした。これも社会学なんですね。

何でもないささいなことに、心をとめる優しさ

に、聞かれる人がインタビューに答えるのは、著者が上からではなく、同じ目線で受け止めるからなのだと言っていました。

著者は「ある種の笑いというもの、心のいちばん奥にある暗い穴のようなもので、なにかあると私たちはそこに逃げ込んで、外の世界の嵐をやりすごす。そうやって私たちは、バランスを取って、かろうじて生きている」とも書いています。「つらい時に笑う」は私にも経験があります。そうしてやり過ごすことも人間の知恵だと思います。本書は何も教えてはくれないけれど、ちょっと悲しい時に、そばにいてくれるような本でした。



## 謎の独立国家ソマリランド

高野秀行著 本の雑誌社 2200円

本書は旧ソマリアにある国際的に認められていない独立国家「ソマリランド」がメインテーマになっています。

「北斗の拳」のような紛争地帯にあって不思議な平和を保ち、独自通貨を持ち、そればかりか複数政党制による民主主義を実現している「ラピュタ」です。また後半では、「ソマリアの海賊」で有名なプントランド、「北斗の拳」の本場旧ソマリア南部地域も取り上げられます。

旧英領ソマリランドの部分だけ「勝手に」独立してソマリランドと名乗り、自分たちだけで話し合って内戦も解決し、十数年も平和を保っているという。そんなことができるのだろうか。にわかに信じがたい。その謎に迫ったのが本書です。

海外諸国から正式に国と認められてなくても、独自の通貨は酷いインフレもなく安定し、学校もあるし、モノも海外から入ってくる。政府の悪口を言ったらすぐ逮捕されることもない。確かに普通に暮らしているのです。ただし海外に離散したソマリ人からの仕送りで財政が成り立っているというのがミソです。

氏族社会ソマリランドでも、掟を破ったら氏族の網を通じて必ず捕まる。つまり、氏族間で抗争がないかぎり、治安はとてもよく保たれる仕組みができていくことに納得します。

ソマリランドは、もともと産業は牧畜しかないのです。貧しくて何も無い国だから、利権もない。利権がないから汚職も少ない。土地や財産や権力をめぐる争いも熾烈ではないのだと高野さんは書きます。

海賊国家プントランドと戦国南部ソマリアと比較しながら、ソマリランドを活写。こんな独立国家があったんですね。目から鱗の面白さでした。

高野さんは探検家として、学生時代から未知の世界を歩いてきました。そこで習得したのが多彩な言語です。通訳を介せず自在に話せるからこそ、ソマリ族の本音と暮らしを、生き生きと描くことに成功しています。

今、日本は安保法案を強行採決してまでして「戦争できる国」にしようとしています。貧しくても、安心して暮らせる社会であって欲しいと、本書を読みながら、自分たちで平和な国を実現させたソマリランドに魅力を覚えました。

## パプーシャ その詩の世界

パプーシャ/ イェジ・フィツォフスキ著 武井摩利訳

「パプーシャの黒い瞳」はポーランド映画です。是非観たかったのですが、「銀河通信」の編集に手間取り、最終日に間に合いませんでした。

せめてパプーシャの詩に触れたいと思いました。

詩を書いた1950年代の代表作を中心に、70年代にわずかに書かれた後期の傑作まで、貴重な詩の数々を紹介。また、パプーシャの詩の解説としても価値の高いフィツォフスキの著書から一章「ジブシー民族の口承文学とジブシーの詩人パプーシャ」の初邦訳と映画の場面写真なども収録されています。

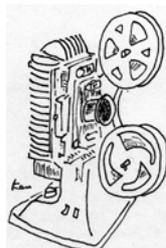
フィツォフスキは「ナチスによってジブシーの大量虐殺が行われたことに彼らは心を奮い立たせ歌の中で迫害者を非難し、自らの運命を証言して見せた」とジブシーの歌をいくつか紹介しています。「きみはどこにいる？きみはどこにいる？どこにいるのか言ってておくれ。この大いなる戦争は きみをどこへ追いやった？」と。昨年ポーランドに行き、文字を持たないジブシーも虐殺の対象になったことを知り、本書に収録された歌に胸が締め付けられました。

詩人の谷川俊太郎は、パプーシャが描く生き生きとした詩のイメージに対し「金銭や地位や物欲とかかわりのない森や川や空から、パプーシャは生きる力を得ている。自然を失いつつある現代の私たちにとって、60余年前に発せられたパプーシャの言葉は、古くなっているどころか驚くほど新鮮に響きます」と称賛のコメントを寄せています。



## アルプス 天空の交響曲

ドイツ ペーター・バーデーレ&セバスチャン・リンデマン監督



ヨーロッパ7カ国にまたがるアルプス山脈を上空から



撮影し、雄大な大自然や人や動物の営みをとらえたドキュメンタリーです。

もとは海だったところがプレートの衝突で盛り上がり、その地層の襞もくっきりと写します。最高峰のモンブランやマッターホルン、アイガーといった名峰をはじめ、世界遺産に登録されている山岳地帯ドロミーティやアレッチ氷河、ヨーロッパのグランドキャニオンと呼ばれるベルドン渓谷や酪農が盛んなアルゴイ地方など、地球が生んだ数々の美しい風景の大パノラマに目を奪われました。人間が自然に踏み込むことで、アルプスの破壊が進んでいることも告発しています。

## あの日の声を探して



フランス・グルジア  
合作 ミシェル・ア  
ザヴィシウス監督

チェチェン紛争は、1944年ロシアからの独立を目指すチェチェンを制圧するためにロシア軍が侵攻して勃発し一旦終結後、99年に

再びロシアが武力侵攻し、その後10年続きました。イラク戦争ほどこの紛争は知られていません。監督はチェチェン紛争で虐げられた人々に光をあてたと、ある新聞で紹介されていました。私もこの映画で初めて知りました。

ロシア兵に家族を殺され、赤ん坊を抱えて逃げる9歳のハジはショックで声を失います。途中で赤ん坊の弟を安心してきそうな民家に置き去りにするのです。

放浪の果てに路頭に迷うハジを自宅に連れ帰り面倒をみるEU職員のキャロル。彼女は難民の調査をしながら、戦争の実態を欧州議会で訴えます。

再生への一步を踏み出すライッサとハジの姉弟。ハジとの出会いを通じ、愛を見出すキャロル。ふたつの希望に満ちた物語とは対照的に、ロシア軍の普通の青年コーリヤは訓練されて残酷な兵士に作り上げられていくさまが描かれます。

戦場が狂気を育てるのでしょうか？大国の軍隊が民間人を平気で虐殺するさまがリアルに伝わってきました。

ロシア人、チェチェン人、フランス人などさまざまな民の視点で、戦争の残酷さと、人間の尊厳を浮かび上がらせました。チェチェン紛争が何であったのか、鋭く訴えた監督の思いが凝縮されています。

## アリスのままで

アメリカ リチャード・グラツァー&ウォッシュ・ウェストモアランド監督



50歳の言語学者アリス（ジュリアン・ムーア）は大学での講義中に言葉が思い出せなくなったり、ジョギング中に家に戻るルートがわからなくなるなどの異変に戸惑います。医師の夫にも告げずに受診して、若年性アルツハイマー病と診断されるのです。

そんな突然の悲劇に見舞われたアリスの苦悩、葛藤を鬼気迫る演技で体現したジュリアンが圧巻でした。

映画はその人がその人である存在理由は何なのかについて描いています。

特にアリスの認知症の介護会議でのスピーチは名シーンでした。「苦しんでいるんじゃない、私は闘っている」と。2013年に観た「ハンナ・アーレント」の学生に講義する場面で「事実から目を背けず、考えることを放棄してはならない」と訴えたシーンを思い出しました。

「がんだったらよかったのに」「わたしがわたしていられた最後の夏」など、胸を突き刺すようなセリフが印象的でした。アルツハイマー発症から進行の過程などをアリスの視線で描いていて、その恐怖に身につまされました。

## ハーツ・アンド・マインズ ーベトナム戦争の真実

ピーター・デイヴィス  
監督

アメリカのベトナム戦争終結から今年で40年。関係者の膨大な証



言と記録映像で構成されたドキュメンタリーです。

そこに浮かび上がる戦争の悲劇は、イラク戦争が終結した後も過激派組織イスラム国の台頭など、いまなお世界各地で絶えず起きている紛争に共通します。日本では10年に劇場初公開されていますが、私は観ていませんでした。今回は再上映です。

ケネディら歴代の米大統領や司令官など侵略側の人物が登場する一方、戦争で家を焼かれ家族を殺害されたベトナム民衆の怒り、帰還米兵の本音が語られます。

ベトナムの民衆が無差別な爆撃で殺される場面は残酷で正視できませんでした。兵士の父が犠牲になり棺にとりすがって、泣き続ける息子の姿や、ナパーム弾で皮膚を焼かれ、裸で逃げまどう幼い少女の姿が惨たらしく胸が震えました。飛行機から、ベトナムの各地に爆弾を落とす時、「何の罪も感じなかった」と語ったアメリカ兵士は、戦場で自分の落としたナパーム弾で自分の息子と同じぐらいの子どもが、焼けただれていることに気がつくりますが、真実を直視できないのです。

当時、日本で作られた様々な物資が沖縄の米軍基地から戦地へ運ばれました。日本経済はベトナム特需の恩恵を受けていたという事実や、「自由に報道できた最後の戦争」と言われるように戦争報道の規制の転換点でもあることも伝えます。日本とアメリカが、今また辺野古に侵略の基地を新設しようとしていることや、報道の自由への介入など、現在の社会情勢にも通ずる問題を考えさせる映画です。



小さき声のカノン  
ー選択する人々

鎌仲ひとみ監督

福島ーチェルノブイリ、国境を越えて「被ばく」から子どもたちを守る母たちのドキュメンタリーです。

福島で家族一緒に暮らすことを選択した母親たちが、葛藤しながらも子どもたちを守るための方法を模索し続けます。泣きながら母たちは強くなっていく姿がとても良かったです。北海道に避難してきている方のお話は何度も聞いていましたが、福島に残った家族の本音は聞く機会がありませんでした。

母たちは子どもたちが通う通学路や幼稚園の除染に奮闘します。もちろん、それでいいと思っているわけではありません。登場する住職夫婦は、各地から安全な野菜を募り、地域の人たちに無料で配ります。市民が科学者になって、土や食品の放射能測定も毎日行っています。

1986年のチェルノブイリ原発事故から29年を経た現在も事故の影響下にあるベラルーシでは、多

らに話を聞き、長期間にわたって低線量の汚染地域で暮らしてきた子どもたちに何が起きたのか、また母親たちはどうやって子どもを守ろうとしたのかを聞きま  
す。こういう具体的な取り組みは初めて知ることばかりで、一番印象に残りました。

「チェルノブイリのかげはし」はたくさんの子どものための保養の受け入れをしてきた団体です。今は福島の子どもたちを受け入れています、その様子も丁寧に紹介していて、どの場面からも若いお母さんたちがささやかであっても、希望を具体的に作り出そうする姿に励まされました。ひとりなら出来ないことも話し合い、学びあい、命に向き合います。

ベラルーシの今も続ける地道な診療体制は、日本も見習うべきです。この映画を観て、原発の再稼働はあり得ないと強く思いました。多くの人に観ていただきたいです。

あん

河瀬直美監督

5月にハンセン病市民学会で紹介され、東村山市の多摩全生園も舞台になっています。カン又映画祭「ある視点」部門のオープニング作品として上映されました。監督、樹木希林さんらと一緒に原作者のドリアン助川さん、森元美代治さんご夫婦も参加されたのです。森元さんはドリアンさんの著書に当事者として助言されたそうです。本はポプラ社から出版されています。



どら焼き屋を舞台に、人生を放棄しかかっている店長千太郎（永瀬正敏）が、あんこ作りの名人である元ハンセン病患者の徳江（樹木希林）との出会いによって再生していく物語です。

ふとした過ちから刑務所で暮らした過去をひきする店長が、時間をかけてあんこを作る徳江の姿に驚きつつ小豆と対話しながら煮込んでいく様子に感銘をうけるのです。出来上がった時の喜びがあふれる場面が心に残りました。河瀬監督が一番丁寧にその様子を描き、二人の間に信頼感が生まれるのです。徳江の丹精込めた手作りのあんが好評を呼び店は繁盛するのですが、元ハンセン病患者だという風評が流れ始めます。常連客の孤独な中学生ワカナ（内田伽羅）と徳江は心通わせませす。療養所に会いにきた二人に、徳江は「あなたと同じ年頃にここに来たのよ」「国語の先生になりたかった」と語り、「あん作り、楽しかったわね～」としみじみと語るシーンは、涙が止まらなかったです。人間の尊厳を奪われても、なお生きたいと願う徳江の気高さと美しさに感動しました。徳江を守ってあげられなかったと悔やむ千太郎が、徳江から新たな人生を生きる力を受け取るのです。

樹木希林が演技を超えていて、人間力を感じさせました。

購読料とカンパをありがとうございます（敬称略）

2015.6.4~7.21

高澤光雄（札幌市）内田篤のり（札幌市）森山軍治郎（美唄市）五十嵐敏文（江別市）カンパ 阿部一子（福島市）切手 中村秀子（千歳市）池端耕治・ひろみ（江別市）カンパ 塩川哲男（札幌市）カンパ

## 「自由と平和のための京大有志の会」の 声明文

生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ちこまなくてはならないで終わる声明文は一行一行に真実があります。

暗誦したいほど心に響きます。

戦争は、防衛を名目に始まる。  
戦争は、兵器産業に富をもたらす。  
戦争は、すぐに制御が効かなくなる。  
戦争は、始めるよりも終わるほうが難しい。  
戦争は、兵士だけでなく、老人や子どもにも災いをもたらす。  
戦争は、人々の四肢だけでなく、心の中にも深い傷を負わせる。  
精神は、操作の対象物ではない。  
生命は、誰かの持ち駒ではない。  
海は、基地に押しつぶされてはならない。  
空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。  
血を流すことを貢献と考える普通の国よりは、知を生み出すことを誇る特殊な国に生きたい。  
学問は、戦争の武器ではない。  
学問は、商売の道具ではない。  
学問は、権力の下僕ではない。  
生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ちこまなくてはならない。

折々のことば

2015.7.20（朝日）私も小さな海を広げたい。

なみだは にんげんのつくることのできる いちばん小さな海です 寺山修司

どうしても譲れないこと、受け容（い）れられないこと。あまりに悲しくてやりきれないこと。小さな者たちの小さな、小さな抗議は、けして、けして小さくはない。どっと押し寄せる波に溺れてしまいそうな大海ではなくて、自分たちでじわりじわり広げてゆく海。「小さな海」までひらがなが続くのがいい。「いちばん短い抒情詩（じょじょうし）」の全文。「愛さないの、愛せないの」から（鷺田清一）

購読料振込とカンパのお願い

27年かかって190号に達しました。200号までは年6回の発行を続けたいと思っています。印刷通信もWebと同じカラーにしています。6号分1000円の購読料は100号から変わっていませんが、カラー印刷が高いため毎回赤字になります。購読料に500円程度のカンパにご協力いただけないでしょうか？Web読者は無料ですが発行を支えて頂けると助かります。ゆうちょ銀行1900-33109571 郵便振替02740-7-56535

吉根由紀子（札幌市）安川誠二（札幌市）カンパ 及川文（札幌市）吉野勝夫（日高町）カンパ含む 大船武彦（立川市）福田光子（秋田市）新妻徹（札幌市）森武昭（狛江市）西村智磨子（杉並区）新西孝司（札幌市）小野有五・妙子（札幌市）カンパ 塚本裕子（札幌市）合計60,200円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。